

あるいは、著者には、思いもよらぬ批評があるやもしれぬが、その点、門外漢の所見として、あらかじめ、ご容赦いただくことをお願いしたい。

本書の主題は、ホワイトカラーという社会階層の形成史を国民的差異を視野に入れながら叙述することにある。ここでは、従来、経済学の理論においては軽視ないし度外視されてきた社会階層と歴史という概念が中心的位置を占める。

そこにおいて、階層という社会現象は、「人びとが一定の職業や所得を共通にするだけでは、階層の社会的意味は十分とはならない。」「現実にはいかなる社会関係やコミットメントを共通とするにいたったかの分析が必要である。」という観点から分析される。コミットメント(主体的関与)という概念は、社会学者がよく用いる概念のようだが、これは、経済学が取り扱う対象、すなわち、商品の生産や流通、あるいは、貨幣の機能に、一見、関係するようには思われない。だが、果たしてそうであろうか。近年、経済学においてもモラル・ハザードやインセンティブの問題が取り上げられるようになったが、これらは、コミットメントと何の関わりもない問題であろうか。

また、ホワイトカラーの形成史を叙述する上で著者は、一定の階層的集合性は、「個々の社会の個別の社会・経済的文脈」を閉却するわけにはいかないと、ホワイトカラーという言葉が使われ始めたアメリカのみならず、イギリス・フランス・ドイツの事情にも分析の範囲を広げる。これは、かつて、各国民的経済の抱える経済・社会問題がそれぞれに異なり、それは各国の歴史を調べることで明らかになるとしたドイツ歴史学派の結論と、期せずして一致している。かつて歴史学派が提起したこの問題は、各国の経済成長の国民的軌道が必ずしも、1つに収斂するものではないということが明らかになりつつある現在、再び注目を集めている。

こうした意味からも、社会階層史の専門的研究書である本書が、いかなる問題を経済学に提起しうるかをみるのは、興味深いことといえよう。

## 2. 本書の構成と概要

本書の提起する問題を指摘する前に、本書の概要を紹介しておこう。本書は、以下の7章からなる。

- 第1章 序説
- 第2章 クラークシップとオフィス
- 第3章 ホワイトカラー階層の生成
- 第4章 オフィスの時代

壽 里 茂

## 『ホワイトカラーの社会史』

日本評論社 1996.3 iii+259 ページ

### 1. 経済学への問題提起

本書は、欧米諸国において1970～80年代にかけて蓄積されたきたが、まだ翻訳はほとんどされていない多数のホワイトカラー研究文献を駆使して、その社会階層史をまとめた研究書である。その分析方法は、社会学であるが、評者の専門の方は経済学であり、社会学の門外漢である。その意味では、専門書の書評の適任者とはいえない。しかしながら、あえてこの本を評するのは、本書が、経済学の方法に対する反省をもたらすと考えるからである。以下、そうした観点から、本書の意義を考察してみたい。

### 第5章 女性化への離陸——ホワイトブラウスの社会史

#### 第6章 比較的文脈

#### 第7章 公務員世界の構造

序章では、ホワイトカラーをめぐる問題の既存の分析方法と本書での社会階層史としての分析方法が述べられる。第2章では、大量かつ広範囲な職種を内包する階層としてのホワイトカラーの原初と目されるクラーク(書記職)のキャリア形成、社会的行動様式等が、「個人企業的資本主義」段階のイギリスに例をとって、分析される。第3章では、ホワイトカラーという言葉が頻繁に使われるアメリカにおいても、それは20世紀に突如現れた階層ではなく、19世紀にすでにその萌芽があったことが様々な研究を通して論証される。第4章では、20世紀の「法人資本主義」段階に、経営官僚制や専門職集団が確立し、ホワイトカラー層が拡大と内部分化をとげていく過程が、アメリカを例に描かれる。第5章では、経営の周辺で働く女性ホワイトカラーの労働形態の歴史が、19世紀後半から20世紀にかけて、イギリス・アメリカを例にとり描かれる。第6章では、イギリス・アメリカとは異なる展開をみせたドイツ・フランスのホワイトカラー階層の形成が分析される。最後に、第7章では、これまでのホワイトカラー形成史研究においてあまり触れられることのなかった、しかし、官僚制のモデルを提供したと考えられる公務員の世界が、各国の差異を明らかにしながら、分析される。

### 3. 社会階層史の知見と制度の経済学

以上の構成をもつ諸章の内容をすべて検討する余裕はない。ここでは、評者が重要と思う論点を3つに絞り、経済学との接点をみてみたい。

第一に、社会階層史は、職業人におけるコミットメントを分析する。著者は、「人びとが一定の職業や所得を共通にするだけでは、階層の社会的意味は十分とはならない。」とはいうが、職業分類そのものを否定しているわけではなく、特定の職業に共通するコミットメントのあり方を明らかにしようとしている。そこには、入職の経路、キャリア形成方式、職業人の価値観などが、分析されている。これは、現代の労働経済学の分析と軌を一にしているといえよう。ここに、社会階層史と経済学との接点の1つがある。とはいえ、ここで私が特に注目したいのは、初期資本主義におけるクラーク(書記職)と雇い主と

の関係の分析である。そこには、雇い主とクラークの一対一の関係というよりは、双方の周辺の人間をも含めて成立する信頼関係が成立していたという指摘がある。雇い主への忠誠が雇用の安定・退職年金等の反対給付をもたらし、クラークの労働インセンティブも、それゆえ維持される。ここには、社会学者P.ブラウのいう給付と特定化されない責務とが信頼をもとに結びついている関係(社会的交換)がみられる。こうした視点は、過去の分析のみならず、宮本光晴『企業と組織の経済学』もいうように、現代の日本の企業分析にも生かせるのではなからうか。

第二に、社会階層史は、単に職業のみを分析するのではなく、生活構造における階層的同一性をも分析する。ここで、とりわけ強調されるのは、教育の階層形成に果たす役割の大きさである。経済学における教育分析の理論的枠組みは、人的資本理論とシグナル理論のみである。他方、社会学には、親の学歴や学習環境等の「文化的資本」が特定の階層に有利に所有されるという、認識がある。著者も指摘するように、イギリスのパブリックスクールやフランスのグランゼコールでは、単なるメリトクラシーが支配していたわけではなく、中上流階層の子弟の占める割合も高かった。このことを省みれば、教育システムの階層的再生産に果たす役割の大きさは、経済学においてももっと分析されてよい。

第三に、社会階層史は、国民的差異の原因を歴史のうちに求める。本書では、19世紀のイギリス、20世紀のアメリカという支配的資本主義国におけるホワイトカラー分析を行うだけでなく、ドイツやフランスにおけるホワイトカラー分析も行われている。例えば、われわれは、ドイツの年金制度では職員と労働者は別制度に属することを知っているが、本書による職員(ホワイトカラー)の階層的同一性の形成の説明により、はじめてその成立の理由を知ることができる。あるいは、われわれは、フランスではカードル(ホワイトカラー)のみの労働組合があることを知っているが、それがフランス独特の所有者的・国家主導の支配構造下におけるホワイトカラーの不満や不安の表れの一形態であることを、著者の説明により、よく理解することができる。こうした社会保障制度や労使関係制度は、労働者の労働へのインセンティブと直接賃金・間接賃金の形成に影響を与える。こうした意味において、制度の国民的相違を確定することは、経済分析にとっても必要な作業となる。

以上、社会階層史の研究成果は、第一に、労働経済分析ないし企業分析における「信頼」概念の導入を示唆し、第二に、教育分析における階層的再生産の視点を開示し、第三に、諸制度の国民的相違へ関心を向けさせる。

ここまで社会階層史との対話を進めると、経済学の方法に対する根本的再検討にまで行き着くだろう。すなわち、経済学の方法は、単に市場の作用を純化して思考実験を行うのではなく、より具体的な経済的・社会的制度の働きを視野に入れて、対象を分析しなければならないというよう。本書は、そうしたことをも思い起こさせる書物である。

[平野泰朗]